

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの実現には、みなさん一人一人の力が必要です。以下の中間とりまとめ（案）へのご意見を広く募っています。ご意見、ご協力をお願いいたします。

ご意見は、環境省自然環境計画課あてにお送りください。その際、ご所属とお名前、ご連絡先を明記するとともに、件名に「森里川海とりまとめへの意見」と入れてください。

また、現時点で特段のご意見がなくても、今後の情報（執筆者、賛同者への参画可否のご連絡等）が必要な方は、その旨ご連絡ください。

<今後の予定>

6月10日 ご意見の〆切、その後、修正版の送付・調整  
6月後半 “とりまとめ”のための最終勉強会  
6月中 “とりまとめ”公表

本件お問い合わせ先 : 環境省自然環境局自然環境計画課  
(山本、速水、岩瀬、長澤)  
ご意見送付用連絡先 : shizen-keikaku@env.go.jp  
FAX 03-3591-3228

## 「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト 中間とりまとめ（案）

日本の多様な気候と複雑な地形は、水や栄養分を循環させながら、森里川海から様々な恵みをもたらすことで人々の暮らしを支えてきました。一方で、自然は時として災害という大きな試練を課します。人々はこうした自然の脅威をいなし、災害をしのぐ知恵も培いました。人々の暮らしは、自然の恵みに感謝し、畏敬の念を忘れず、天地自然の理（ことわり）に従って営まれてきたとも言えるでしょう。そのような中で、日本人特有の自然観が育まれました。

近代になって、日本は西洋の産業文明をとり入れた国づくりを進めました。特に戦後の経済成長期以降、都市に住む人々が急増し海外から輸入する資源に大きく依存するようになると、人々の暮らしは自然から切り離され、自然の恵みを活かして成り立ってきた産業活動が顧みられなくなりました。結果として、開発により自然が失われ、あるいは、人による手入れが少なくなることで荒廃した自然が増えてきてしまったのが現在の日本の姿です。私たちの意識からも、自然とのつながりは消えてしまったかのようです。また、洪水の起きやすい氾濫原など、従来は人が住まなかった場所への居住が進んだことや、気候変動の影響もあり、自然災害の規模や頻度が極めて大きくなっています。2011年の東日本大震災によって、私たちは人工的な構造物だけで自然災害をコントロールする限界を思い知りました。

これからの日本は人口の減少と高齢化が加速し、また経済活動の質と量が大きく変化する時代へと向かっています。今こそ、森里川海が有するストックを「自然資本」として、そこから有形無形の様々な恵みを賢く引き出し、それを維持する過程で育まれる心を、これからの日本の社会の土台としていくことが必要ではないでしょうか。

かつて人々は、日々、暮らしていくための糧を得るため、林や草地、ため池や浜を共有の財産として手入れを欠かしませんでした。これらの手入れは、地域社会全体で「結い」や「自普請」といったお互いに助け合う仕組みをつくって行われ、このような仕組みが、地域のつながりを強くしました。また、将来世代を慮（おもんばか）り、末永く自然の恵みが得られるように、使い過ぎない工夫を行ってきました。人口が減少し、手入れが十分行き届かなくなった今、国全体で「結い」のつながりを取り戻し、私たちみんながそれぞれのスタイルで森里川海の手入れに関わり合う。そして、決して使い過ぎない。そんな、これからの時代に相応しい、自然の恵みを持続可能な形で引き出す新たな仕組みを構築できれば、地方の創生にもつながるはずです。

日々めざましく科学技術が発達するなか、豊かな自然は、私たちの将来の生活を豊かにし、経済活動の選択肢を広げる資源でもあります。また都会とは異なる自然の中での豊かな暮らしは、これからの知的生産の糧となるでしょう。最新の科学と技術を使いながら、森里川海を俯瞰し、上流域と下流域、農山漁村と都市がしっかりとつながり、多様な世代や組織がそれを支え合う。そんな地域づくり、国づくりを目指すことは、日本の力を高め、国際的にも誇り得るものと考えます。日本人の英知を結集して、自然を豊かに再生し、森里川海の恵みを引き出す社会へと転換する歯車を回していきませんか。

木の安らぎを感じられる暮らし、それを支える美しい森、トキやコウノトリが舞う里、豊かな魚介類を育む川や海、その中で遊ぶ子どもたち、そんな風景がどこでも当たり前に見える国。そんな“いのち輝く国づくり”を目指して、私たちは一人一人が力を尽くすとともに、仲間を募って活動を広げていきます。

執筆者一同

（以下は、後文として最後に持って行くことも一案）

この“とりまとめ”は、環境省の「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチームにおける検討に端を発したものです。しかし、この取組は、環境省をはじめとする行政だけで進めることはできません。環境省は、新たな文明社会の実現を目指し、前例、慣例にこだわらず、持てる力を使って“とりまとめ”の実現を支えていきます。多くの国民のみなさまのご支援をお願いいたします。

環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム

## 1. 現状と課題

### (1) 森里川海からの豊かな恵み

私たちの暮らしは、自然の恵みに支えられています。豊かな森は酸素と清らかな水を生みます。大地に張った根は絡み合い、土壌を安定に保ちます。里では脈々と続く営みによって地味豊かな田畑が作られます。水が田畑を潤し、安全で美味しい農作物が育まれます。木や竹は、生活道具の材料や煮炊き等のエネルギーとして利用され、森の落ち葉や枯れ草は大切な肥料として用いられてきました。水を集めて流れる川は、下流に暮らす人々の生活や産業を支えています。森と海は川でつながり、土砂の移動により干潟・砂浜など魚介類のゆりかごが形成され、森から供給される栄養塩類は、海の生態系を豊かにし、魚貝類を育みます。

「山紫水明」と表現されるような美しい日本の風景は私たちの心身を癒やし、心を豊かにしてくれます。自然とのふれあいを求めて、多くの人々が、森里川海を訪れています。

日本には、自然と文化が一体となった「風土」という言葉があります。地域の特色ある風土は、地域の自然の恵みと深く関係し、地域固有の食文化、工芸、芸能などを育んできました。地域の個性は自然の恵みの上に成り立っており、地方創生の重要な資源でもあります。

人が上手に関わり合うことで、自然は多くの恵みを持続的に与えてくれます。水田の管理、薪や炭のための伐採、肥料や牛馬の餌となる草の刈り取りなどは、永きにわたって続けられてきました。このような作業は「結い」や「自普請」と呼ばれる共同作業で行われてきました。人間の活動の結果として維持されてきた里地里山には、特有の様々な生き物が棲んでいます。むしろ適度な人間活動が持続的な恵みと豊かな生き物を支えてきたと考えられています。

また、山の幸や海の幸も上手に利用してきました。一定期間利用を禁止する「止め山」や「止め磯」、解禁する「口あけ」は恵みを絶やさないためのルールです。そして得られた恵みはご近所に配られます。

このように、私たちは森里川海を共同で管理し、恵みも共有してきました。自然との関わりの中で、「自然の恵みをひきだす業（わざ）」が生まれ、これを結節点として日本人の共助の精神が育まれてきたと言えます。

一方で、自然は人の思い通りにならず、時に大きな自然災害をもたらします。地震や火山が多く、地形が急峻な日本列島は、災害の多い国です。私たちは、自然と力で対峙するのではなく、畏敬の念を持って接してきました。また、自然に抗わず、危険な場所をうまく避けてきました。さらに、土砂災害を防ぐための森の保全や植樹、水の勢いをコントロールする堤の設置、遊水地の確保など、森里川海との付き合い方をよく知り、手を加えて上手に管理してきました。このような管理により、下流域の安全も守られてきました。

豊作を祈願する「御田植え祭」、収穫に感謝する「豊年祭」。各地の年中行

事は、季節という時の循環の中でもたらされる森里川海の恵みへの感謝とともに、思うにまかせない自然に対する畏れと祈り、そしてまたこの日を迎えられることの喜びに満ちています。災害の多い国で、平穩無事に一年を過ごすことこそが、何より望みであり、願いであったのです。

このように、森里川海がもたらす恵みは大きく多岐にわたり、日本人の精神も天地自然の理（ことわり）の中で形成されてきました。私たちは、水、季節、生命の大いなる循環の輪の中に生かされています。森里川海のつながりを豊かに保ち、循環の輪を途切れさせないことで、私たちは自然の恵みに支えられて、安全で豊かな生活を送ってきたのです。

## （２） 森里川海の危機と課題

私達が生きるために必要な自然の恵みを与えてくれる森里川海とそのつながりが、今、大きな危機に直面しています。

### （森の危機）

日本は国土の3分の2を森林が占めています。そのうち40%が人工林であり、林業を支えてきました。しかし、海外からの木材の輸入、木材価格の下落、経営コストの上昇により、その収益性が低下し、日本の森林資源は、量的には充実しているにもかかわらず、伐採が進まない状況です。あるいは伐採しても植林が行われないという状況もみられます。日本の林業はまさに、森林経営の持続性と森林資源の持続性という2つの面で危機に瀕しています。

こうして、森林整備が十分に行われない人工林では貯水機能の低下により土砂崩れが起りやすくなります。なお、高齢化した人工林では二酸化炭素の吸収機能が弱くなります。

### （里の危機）

古来より我々に、多くの生活の資源を与えてきた里山の自然は、人の手が加えられる中で維持されてきました。しかし、都市近郊の里山は、大規模な宅地開発により姿を消し、また地方の里山は、農林業の担い手の減少、生活様式の変化に伴う利用価値の低下などにより、棚田や雑木林の放置が進みました。その結果、かつては身近な存在だった里山の動植物が減少し、竹林の拡大、野生鳥獣や外来種の被害が深刻化しています。また、所有者が不在になる里山も多く、手入れをしたくてもできない現状も見られます。

農薬や化学肥料の過度の使用が里地の生態系に悪影響を及ぼすことも懸念されます。また、水田耕作に伴う水管理の方法や水路の構造上の変化により、水田、水路、ため池等と河川の生態的なつながりが分断され、生き物が往き来できない状態になっています。

人と森・里の関係の変化は、近年増加しているニホンジカやイノシシといった野生鳥獣による農林水産業や生態系への被害と大きく関係してきています。野生鳥獣による農林水産業への被害は、約200億円／年まで拡大し、食

害により下層植生がはぎ取られた森では土壌の流出が見られる地域もあります。その主な原因は、こうした野生鳥獣が、もともと繁殖力が高い動物であることに加え、鳥獣の隠れ場や餌場となる放棄林・耕作放棄地の増加、狩猟者の減少による捕獲圧の低下などにより、人と鳥獣の緊張関係で保たれてきた共存のためのバランスが崩れたことが影響していると言われています。

#### (川・海の危機)

また、目線を下流域に移してみると、河川沿いの氾濫原の湿地帯や河畔林は多くが農地や宅地へと開発されました。洪水等の災害を防止するためのダム、河口堰の整備や河川の改修は、河川生態系の維持に必要な攪乱の機会を減少させています。また、これらの河川構造物は、海と川を往き来する魚種の移動を阻害し、下流域への砂礫等の供給を減少させています。

陸域と海域が接し、それらの相互作用のもとにある沿岸域の水際環境も、かつての姿を失いつつあります。沿岸開発による直接的影響により砂浜や藻場・干潟の面積が急激に減り、上流からの土砂等の供給の減少が、残された水際環境の悪化に拍車をかけています。都市部など上流域から流入する生活排水や工場排水等による水質汚濁も十分に改善されていません。

ただし、川や海における生物多様性の減少要因の一部は、水害という大きな危機への対応として必要なものであることも多く、人口減少などの状況を踏まえたバランスのとれた対応が不可欠です。

また、人手を加えることにより、生物多様性と高い生物生産性が保たれてきた里海では、漁業者による自主的共同管理により、沿岸域においても人と自然の共存する姿がありました。しかし、漁村コミュニティの衰退とともに、豊かな里海が存続の危機にあります。

これらの複合的な要因で、我々の食に欠かせなかったアサリ、海苔、牡蠣、シジミ等、水際の実産物もその生産量を減らしているのです。

#### (つながりの分断による危機)

これまで述べてきた森から海のはつながりは、生物多様性の確保のみならず、土砂供給や水量調整の役割を担ってきましたが、その分断によりそれらの機能は低下しています。また、氾濫原等が宅地化され人が住むようになり、上流域の開発の影響に気候変動の影響も加わることで、災害リスクが増大しつつあります。

かつての里地・里山・里海は地域住民が共同で作業を行う場でしたが、これらの自然に手を入れない暮らしは、人と自然、人と人のつながりを喪失させ、コミュニティや地域の活力の低下、日本人の食や文化の喪失へと影響してきています。また多くの人たちは、都市部へ居住し、自然と直接的には関わらない生活を過ごしています。こうしたことから、自然の恵みの享受のつながりは一般的には目に見えにくく、私たちが意識する機会は少なくなりました。今では、自然の中で遊ぶ子ども自体が絶滅危惧状態となり、自然の恵みに対する感謝の意識の希薄化と自然観の喪失も起こっています。

これまで述べてきたように、今、森里川海のつながり、また、森里川海と人とのつながりが失われ、自然資本からの恵みを上手く引き出せない状態が深刻化しつつあります。農林水産業が衰退し、地方の過疎化・高齢化が進むことで、恵みを引き出す日本人の業（わざ）も失いつつあります。私たちが気づかない間に、私たち日本人の基盤にあるものが崩壊しつつあるのです。

#### （仕組み上の課題）

森里川海に関わる行政は多岐にわたり、それぞれの目的のための施策がそれぞれの合理性、効率性を優先して行われていることにより、結果として、森里川海の恵みが損なわれる事態が生じてしまうことがあります。森里川海のとつながりを総合的にとらえ、長期的な視野で国土のランドデザインを描き、個別の取組をつなげていくことが必要です。

### （3）各地で行われている多様な活動

森里川海のとつながりを豊かに保ち、自然の恵みを引き出す、あるいは蘇らせる活動が全国で始まっています。

「森は海の恋人」という活動は、1989年に気仙沼のカキ養殖漁師仲間によって始められました。豊かな海のために豊かな森をつくる活動です。毎年開催されている「全国豊かな海づくり大会」においても、豊かな海のために、豊かな森と川が重要であることが認識され、海のない県でも大会が開催されるようになりました。

環境に配慮した森づくりもはじまっています。国際的な森林認証であるFSC（Forest Stewardship Council）認証等の取得をめざす地域や林業家も増えています。樹木を適度に伐採することで、いのちがあふれ、水が清い豊かな森づくりを進めている林業家もいます。その所有林で行われている樹齢300年の森づくりは、日本の歴史的な木造建築物を将来に引き継ぐためにも重要な取組です。

里地里山の保全に向けた管理も全国各地で行われています。これは、人と自然の関わりを取り戻す活動でもあります。広島県北広島町では、樹木を薪にしてエネルギーとして利用し、地域通貨を使うことで、地域内に経済循環を生む取組が進められています。地域にある資源をエネルギーとして使うことは、地域の外に出ていくエネルギー燃料費を抑える効果もあります。

兵庫県豊岡市ではコウノトリをシンボルとして環境の保全と利用を両立させる取組が進められています。コウノトリのえさ場を確保するため、農薬や化学肥料に頼らない「コウノトリ育む農法」で栽培された米は高価格で販売され、農家の所得増につながっています。環境を良くする行動により経済が活性化し、環境と経済が共鳴する関係ができています。豊岡市を流れる円山川水系では、治水と利水に考慮しながら、コウノトリの生息環境づくりをめざした河川整備が行われています。そして、このような取組に子どもたちも関わることで、ふるさとへの誇りも育まれています。

海辺を再生する取組も全国で展開されています。東京湾では、市民を含む

多様な主体の参加によりアマモ場の再生が行われています。アマモ場は魚や貝の産卵や生育の場であり、水質浄化機能があり、光合成により酸素を供給します。自然の恵みを取り戻すための、いわば「海の森づくり」と言える取組です。

このように各地で多様な活動が展開されていますが、まだまだ個別の点としての活動が多く、今後はこれらの活動をつないで大きなうねりに変えていく必要があります。

## 2. 目標

以下の2つを目標に掲げます。

### ○ 森里川海を豊かに保ち、その恵みを引き出します。

森里川海が本来持つ力を再生し、恵み（清浄な空気、豊かな水、食料・資材等の恵みを供給する力や自然災害へのしなやかな対応力）を引き出すことのできる社会をつくりまします。

### ○ 一人一人が、森里川海の恵みを支える社会をつくりまします。

私たちの暮らしは森里川海の恵みに支えられているだけでなく、日々の暮らし方（消費行動や休暇の過ごし方など）を変えることによって、私たちが森里川海を支えることができます。一人一人がそれを意識して暮らす社会への変革を図ります。

## 3. 基本原則

ここでは、目標を達成する上で、踏まえなければいけない原則や基本的考え方を示します。

まず、日本の社会は、人口減少・高齢化が進むことを前提にする必要があるということです。人口減少により、土地に余裕ができる分、新たな暮らし方を考えることが可能となる一方、高齢化もあいまって森里川海を手入れする人手はますます不足することが懸念され、効率化も求められます。

また、森里川海の価値を再確認し、自然資本として手入れ（管理）を推進することで、雇用が生まれるとともに、地域のつながりが強まります。結果として、日本の大きな課題である地方の創生にもつながります。

一方で、地域にだけ管理の負担を負わせることは適当ではありません。森里川海の恵みは、その地域に限定されるものではないからです。森里川海からの恵みには、今の社会で貨幣交換できるもの（食料、資材等）と、すぐに貨幣交換はできないものの現在の社会の基盤となるもの（清浄な空気、植物を育む土壌、防災機能等）、また、将来の社会の豊かさと安全を確保するもの（生育に時間のかかる森林、風景等）があります。このため、森里川海管理にあたって経済循環を活用することは当然ですが、インフラとして管理をする側面もあります。現在の里地・里山・里海の状況は、将来の資産を先に使ってしまったたり、放置して使えない状態にしてしまったりという状況にあります。将来世代のために、国全体、公的機関はもちろんのこと、企業、国民一人ひとりが役割を担っていく必要があります。併せて、地域で活動を行う人は、現在だけでなく将来の国土を支えている誇りと自覚を持つことが重要です。

また、森里川海のつながりを確保し、恵みを最大化するためには、「森」「里」「川」「海」それぞれの個別の取組では十分ではありません。行政界ごとに区切られた地域での取組でも十分ではありません。関係者間、地域間のより一層の連携・協力により、取組が効果的なものになります。

このプロジェクトでは、できるだけわかりやすく目指す姿を設定し、そこに向かって課題や対策を具体化し（バックキャストिंग・アプローチ）、地域のさまざまな取組を積み重ねることで実現するプログラムを提案しています。実現のためには、さまざまな関係者の理解と協力を得て、連携していく必要があります。

さらに、これまで別の目的（災害対策や農林水産業推進等）のために行われてきた取組についても、森里川海を豊かに保ち、恵みを引き出すことを前提として行われるよう促すことも重要です。

#### 4. 具体的な取組アイデア

このプロジェクトでは、国民一人一人がその成果を実感できるよう、わかりやすい目標を掲げ、それに向けたステップを明確にしながら具体的な取組を進めることを提案します。

その際に、これまで十分手当てできていなかった新たな計画づくりや取組を中心に実施・支援することが重要であり、既存の予算や仕組みは最大限活用するものとします。特に、省庁間や地域間で連携が十分でなかった分野の取組、また、少しの支援があれば自発的な活動が期待できる草の根の取組への支援を重視します。

##### .. 個別プログラム（例）

また、国民一人一人、NPO、企業、地方公共団体、国の関係省庁が、それぞれの役割を果たしつつ、一体となって取り組むことが不可欠であり、このような体制を作っていくこと自体も、このプロジェクトの目的の一つです。特に、国民一人一人の意思ができる限り反映され、自分自身の問題として取り組んでもらえるような機運や仕組みづくりが重要です。

##### .. 実現に向けた仕組みの提案

#### （1） 個別プログラム（例）

以下に○つのプログラムを提案します。ただし、（2）で提案している「森里川海協議会」において議論して決定することが適当なので、現時点ではアイデアとして示しているものです。

#### ■ 森林のメタボ解消、健全化プログラム

日本の森林の蓄積量は過去最大。これを活用しつつ、将来につなぐための事業を実施。木材としての活用他、バイオマスとしての活用も推進。併せて、森林施業における環境配慮を進めることが不可欠。

（活動例）

- ・ 森里川海の恵みを引き出し、生物多様性を豊かにする森林施業のガイドライン作成・普及

- ・ 生産材や製品の認証取得を促進
- ・ バイオマスとしての森林活用指針の作成・普及
- ・ 木材の消費行動の適正化の推進（海外の違法伐採抑止にも貢献）
- ・ 木材市場の活性化（木造建築の普及など）
- ・

## ■ 生態系を活用したしなやかな災害対策プログラム

国土利用のあり方を人口減少社会にふさわしいものに見直す。森林、河川、農地間の統合的で切れ目のない災害対策が重要。森里川海が本来持つ力を自然資本として活用することで、防災施設等の管理コスト低減を図ることができる可能性。気候変動への適応も考慮。

（活動例）

- ・ 地域ごとの土地利用計画の見直し（居住地域をセットバックし、川幅を広げて遊水地を設定など）
- ・ 自然の防潮堤ともいえるサンゴ礁に負荷をかけない土地利用
- ・

## ■ 「江戸前」など地域産食材再生のための環境づくりプログラム

古くから日本人の食生活の中心に魚介類があった。「江戸前」の食文化に代表されるように、多くの地域で、そこで獲れる魚介類をつかった独自の食文化が発達している。ウナギやアサリをはじめとする魚介類などを持続的に利用するために、山から川、海をつながりを見直し、環境の改善を図る。

（活動例）

- ・ 河川内の生き物の移動を阻害する段差の解消
- ・ 藻場・干潟の再生
- ・ 海域の環境改善のための植林、湿地の再生等（「森は海の恋人」運動ほか）
- ・ 豊かさを実感できる「里海」づくり活動の推進
- ・

## ■ トキやコウノトリなどが舞う国土づくりプログラム

トキやコウノトリ、ツル類、猛禽類などの大型鳥類が生息できる環境は、その他の生き物も豊かで、人と生き物の関係も適切である。また、国土レベルで生息地の配置を検討する必要がある。このため、「大きな鳥が舞う」ことを象徴として、国土の環境づくりを行うほか、身近な指標種を用いた地域環境づくりも促進する。

（活動例）

- ・ 多くの生き物が生息できる水田環境づくり
- ・ 生き物にやさしい農業の推進
- ・ 田んぼと水路の生き物の移動を阻害する段差の解消
- ・ 重要な生息地となる「生物多様性保全上重要な里地里山／湿地／海域」の保全・再生
- ・ 身近な指標種を選択し、地域ごとにその指標種の保全を通じた環境保全型の地域づくりを行う「一村一生物運動」の推進

## ■ 美しい日本の風景再生プログラム

「美しさ」、「心地よさ」も自然の恵みの一つ。圧倒的な雄大さや機能的な美しさは、人の心を育てるだけでなく、観光資源としても重要。

(活動例)

- ・ 北斎・広重の浮世絵の風景再生
- ・ 雄大な草原の再生

## ■ シカなどの鳥獣や外来生物から国土・国民生活を守るプログラム

ニホンジカやイノシシなどの鳥獣の増加により、農林水産業のみならず、生活環境、生態系が脅かされている。アライグマなどの外来生物の被害も深刻である。これは、農山村のみの問題ではなく、地方都市において大型獣が出没し住民がけがをしたり、都市間をつなぐ鉄道の遅延が生じるなどしている。

必要な捕獲等の対策ができるような社会づくりを行う。

(活動例)

- ・ 捕獲をプロとして行う専門的捕獲事業者の育成
- ・ 人間のタンパク源としての再評価、ジビエの振興

## ■ 森里川海の中で遊ぶ子どもの復活プログラム

子どもたちが、里山や川で遊び豊かな感性を育む姿は、一昔前には普通の風景。子どもたちが、森里川海の中で遊んで自然を身近に感じ、その恵みを知る機会を増やすことにより、森里川海を将来世代につないでいく。

(活動例)

- ・ 川ガキ・山ガキ・海ガキ養成学校開校
- ・ 子どもの農山漁村体験の促進
- ・ 子どもホタレンジャー
- ・ 身近な河川の水生生物調査

## ■ 森里川海とつながるライフスタイルへの転換プログラム

一人一人の消費行動や余暇の時間の過ごし方によって、森里川海を豊かに保つことも可能。日々森里川海の恵みを意識し、暮らしを通じて森里川海の管理に貢献できる社会づくりを行う。

(活動例)

- ・ 地域産食材や環境配慮食材の購入促進
- ・ 木材の消費行動の適正化の推進（海外の違法伐採抑止にも貢献）（再掲）
- ・ エコツーリズムの推進
- ・ 森里川海の管理に貢献する2地域居住の推進

## (2) 実現に向けた仕組み

森里川海を豊かに保ち、恵みを引き出す取組は、国土レベルと地域レベルでの取組を連動させることが重要です。一人一人の身の回りで、目に見える取組が進むことこそが、森里川海の恵みを日々意識し支える社会の実現につながります。

また、森里川海が本来持つ力を再生したり、その恵みを引き出すためには、資金と労力が必要です。行政機関の取組に加え、地域の外も含めて恵みを受ける一人一人が少しずつ負担したり、意思のある個人や企業の貢献を求めていくことで、取組が加速するのみならず、森里川海の課題や取組を自分のものとして捉え、広げていくことができると考えます。

### ○ ボトムアップで取組を進めるための仕組み

関心を持つ人が意見を言うことのできる場を地域ごとに設定し、地域の意見が国の方針に反映される仕組みが重要です。

仮に、国全体の会議として「森里川海協議会」、地域ごとの会議として「森里川海地域協議会（以下、「地域協議会」）」を設置することを提案します。これらの会議は、幅広い参加を得て、森里川海のあるべき姿や管理の方向性（プログラムなど）を検討する他、取組の進捗や森里川海の状況の評価を行います。

#### 【それぞれの会議の役割（案）】

森里川海協議会	<p>地域の状況を踏まえつつ、国土レベルで森里川海のあるべき姿や管理の方向性（プログラムなど）を検討・決定。地域に対する指針として示す。また、全国を取組の進捗と森里川海の状況の評価を行う。</p> <p>地域協議会の代表や国土管理の専門家、公募等による参加者等の構成とする。広く意見を収集できる仕組みも検討。</p>
地域協議会	<p>森里川海協議会で示された指針を参考にしつつ、地域の実情に応じた森里川海のあるべき姿や管理の方向性（地域固有のプログラムなど）や実施計画の検討・決定、実施すべき事業の検討・決定を行う。また、地域を取組の進捗や地域の森里川海の状況の評価を行う。</p> <p>地域で活動している団体や個人、専門家、公募等による参加者等の構成とする。広く意見を収集できる仕組みも検討。</p> <p>地域の範囲については、今後検討が必要であるが、全国を10ブロック程度に分けて設置し、さらに必要に応じて流域や島嶼等に係る分科会の設置を行うイメージ。</p>

### ○ 資金や労力を確保し、みんなで森里川海を支えるための方策

一人一人の参加意識を高めるために、森里川海の恵みを受けるすべての個人や企業のそれぞれが少額を負担することを提案します（例えば、個人であれば一人1日1～2円程度など）。少額の負担に加えて、趣旨に賛同する個人や企

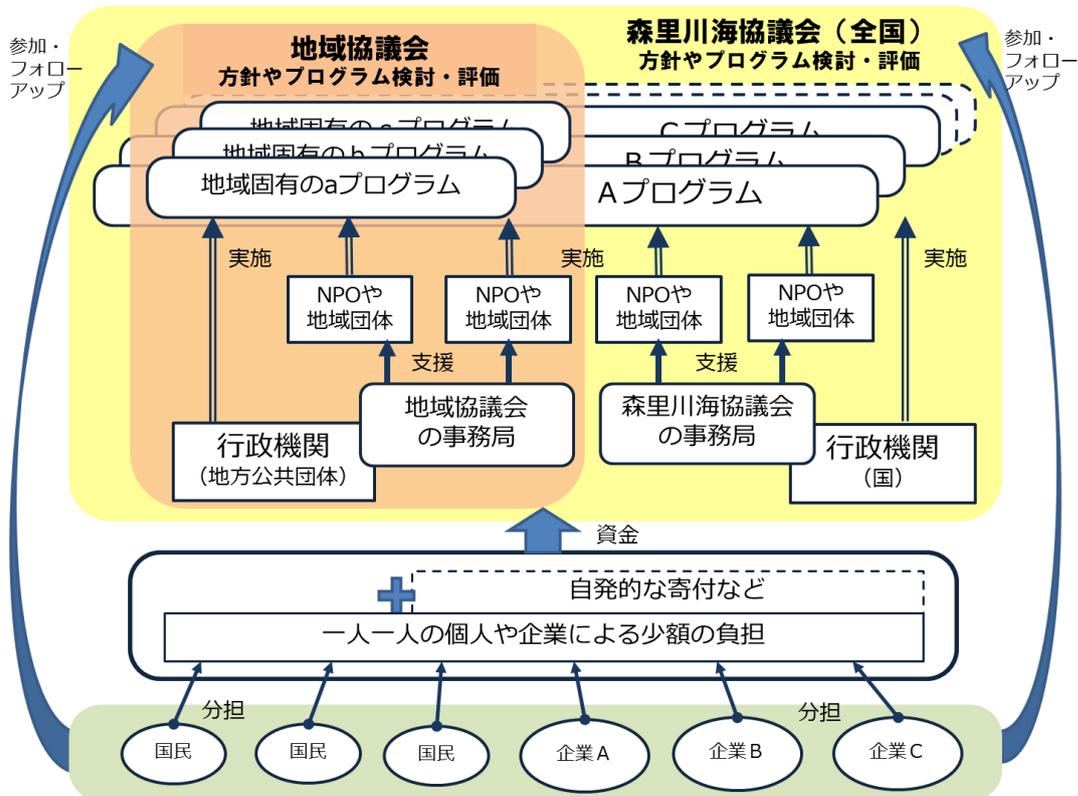
業からは、自発的な寄付を受け入れることができる仕組みとし、取組を広げていきます。これらは、次世代への貯金や自然へのお賽銭といえます。この資金を森里川海協議会で決定したプログラムの推進に充て、同協議会でその進捗を継続的にフォローアップしていくことにより、一人一人の負担が自然の恵みを引き出すことに具体的につながっていることを実感できるようにします。

また、CSR やナショナルトラスト、観光地での利用者による負担などは、これまで以上に推進することが求められます。特に、CSR については、その推進が企業の評価につながる社会をつくるのが重要です。

さらに、資金としての負担だけでなく、労力としての負担も重要です。森里川海の管理の担い手を確保する観点から、地方居住や、シニア世代などの2地域居住を推進し地域の活性化を図ることで、森里川海の管理も推進することも考えられます。

そして重要なことが人づくりです。様々なプログラムを実現させるためには、現場で技術的な助言や指導を行ったり、各組織をつないだりする「人」が重要な役割を果たします。このような人材を発掘し、現場での取組に継続的に関わることが可能となる仕組みをつくる必要があります。規模は小さくても生業に結びつくことができれば、雇用が生まれ、地方の創生にもつながるはずです。

<実現する仕組みのイメージ図>



○ 今後の進め方

以上の提案を実現するためには、広く理解を得つつ、様々な検討を行う必要があります。中でも、資金を確保するための新しい仕組みについては、精緻な検討が必要です。2～3年程度をかけて、しっかり議論して制度設計を行うことが現実的といえるでしょう。ただし、制度設計のための議論を始める上でも、新しい仕組みの必要性について、できる限り早期に国民的な合意を得ることが不可欠です。

制度設計と併行して、森里川海協議会や地域協議会の準備、国土レベル、地域レベルで必要な取組についての議論を進めることが重要です。

(参考)

- ・ 中環審意見具申（環境・生命文明社会）
- ・ 生物多様性国家戦略